

シャンドス卿とフランシス・ベーコン

小 岸 昭

一、なぜベーコン宛なのか？

なによりもまず、ホーフマンスタールの『ある手紙』の差し出し人 Chandos とは正式にどのような発音するのだろうか。学会誌や大学紀要のたぐいでも、あるいは翻訳や最新の大百科辞典（平凡社刊）などでも、Chandos は例外なく「チャンドス」と表記されており、そこには何ひとつ疑問の余地がないように見える。ドイツ人に尋ねても、当然のことのように「チャンドス！」という答えが返ってくる。だが、ある時ドゥーデンの発音辞典およびブロックハウスで Chandos が「シャンドス」とフランス語風に表記されているのを見て以来、今まで自明のことと置いていたことが急にぐらつきだし、それによって当該の『手紙』をもう一度新しい目で読み直してみようとする興味をそそられた。それ以後、マンリー・P・ホルルの象徴哲学体系Ⅲ『カバラと薔薇十字団』（大沼忠弘他訳、人文書院、二三四頁）のなかでシェイクスピアの肖像画を描いた画家に Chandos という名前を見出したほかは、その名を冠した人物ともまだ出くわしたことがない。チャンドスカシャンドスカ、とりあえずこの

問題に結着をつける意味で、ここではドゥーデンおよびブロックハウスの表記にしたがって論を進めたい。

この、世に有名なホーフマンスタールの芸術論『シャンドス卿の手紙』（一九〇二年）について、あるいはもう何ひとつ言うことがないかもしれない。だが、それが二〇世紀の幕開けとともに突如起こったドイツ文学の革命を記すドキュメントとしてのみ今なお理解されているとすれば、この手紙のもっと直接的な問題について語る余地がもう少し残されているように思われる。この地点から、この手紙が内包しているもっとも基本的な問題、そしてわれわれの考察に出発点をあたえてくれそうな問題を、つぎのような問いに集約できる。すなわち、この手紙はなぜベーコン宛なのか？

バートランド・ラッセルの『西洋哲学史』のフランシス・ベーコンの項を要約して言えば、ベーコン（一五六一—一六二六年）は、エリザベス一世の時代に二三歳で国会議員になり、女王の重臣エセックス伯の顧問となった。しかしエセックスが一六〇一年二月謀叛を起して女王の愛顧を失うと、ベーコンは、いち早く告発者の側に回って彼を見捨てたが、女王の存命中その愛顧を十分に受けるにはいたらなかった。だが、一六〇三年にジェームズ一世が即位してから前途がひらけ、一六一八年には大法官に任ぜられ、ヴェルラム男爵を授けられた。ついで一六二一年、セント・オルバンズ子爵に叙任された。その数週間後、彼は訴訟関係者から汚職収賄のかどで告発され、ロンドン塔に幽閉されたが、二日後に釈放された。「しかし、彼は公的生活の放棄を余儀なくされ、余生を重要な著述に過ごすことを強いられたのである。」（バートランド・ラッセル著作集13『西洋哲学史』Ⅲ、市井三郎訳、みすず書房、一九九頁以下）

こうした描写から見えてくるベーコン像は、どう見ても道徳的にすぐれた偉大な人物とは言い難い。それどころ

ろか、通説にしたがえば、ベーコンは友人にたいしては忘恩的で、時の権力にたいしては屈從的で、法官としては瀆職さえ行なった人物でもあった（世界の大思想6「ベーコン」服部英次郎他訳、河出書房新社、四六三頁）。とすれば、確かにイギリスの詩人にして諷刺家のアレクサンダー・ポープがベーコンについて「あらゆる人間のなかでもっとも賢明な、もっとも輝ける人物、そしてもっとも卑しむべき人物」と評したエピグラムが有名になる理由もそこにある。ラッセルがベーコンなる人物に関してくださったような結論もまた、右のエピグラムからそう隔ってはいないだろう。「彼は前任者のトーマス・モーア卿のように、優れて道徳性の高い人物ではなかったが、例外的に邪悪でもなかったのである。道徳的には彼は普通人であり、同時代人の大部分のひとびとより優れても劣ってもいなかったのである。」（ラッセル上掲書、二〇〇頁）

こうした評言が真実ならば、シャンドス卿はなぜ道徳的にすぐれたトーマス・モーアにはなく、よりによって「道徳的には普通人」にすぎないフランシス・ベーコンに宛てて、文学的関心を放棄するにいたった理由を手紙で説明しようと試みるのであろうか。すでに『手紙』の冒頭から、ラッセルなどのベーコン観とは真つ向から対立するベーコン像が描き出されているのである。

「尊敬する友よ、貴方は二か年にわたる私の沈黙を御容赦くださり、あのようなお手紙をくださった御好意に感謝いたします。私への御配慮、私が陥っていると思っておられる精神的な硬直状態についての不審の念を軽妙洒脱に表現してくださったのは、ただ御親切というにとどまりません。こうした表現は、人生の危機に浸透されながらもけっして勇気を失わない偉大な人々だけが持つ能力です。」（*PL. S. 7.*）⁽¹⁾

このようにシャンドス卿にとってフランシス・ベーコンは、あつひしやう阿諛追従を完璧に操る廷臣でも反動の思想家でも

なく、なによりも偉大な氣宇広大な人間であった。ホーフマンスタールは、この『手紙』のなかでも他の個所でも、ベーコンをあえてスキャンダラスな通説の暗がりから救出しようとはしていない。彼にとつては、そのような暗がりをつきぬけてベーコンの全体像を深い所でとらえるために、後に述べるクラッス挿話の場合がそうであるように、たとえばつぎのような挿話だけで十分だったろう。

一六二六年三月も終わりのある日、ベーコンは馬車に乗って、ロンドン郊外のハイゲートに出かけた。季節はずれの雪が地上を埋めていた。肉の保存が塩でできるように雪でもできるのではないかと彼は考える。興味をそられて近くの農家から一羽の鶏を買いとめ、その腹に雪をつめこんで、雪が肉の腐敗を妨げるか否かについて実験中、にわかには悪寒をおぼえ、帰ることもできない状態だった。この風邪から肺炎を併発し、四月九日に彼は死去した。その死の床からの手紙のなかで、ベーコンは彼の深く尊敬するローマの博物学者ガイウス・プリニウスに自らを比している。プリニウスもまたヴェスヴィオス火山を踏査してその命を失ったのである。しかし、ベーコンは自分が死ぬとは思っていなかった。だが、彼は死んだのである。それは彼が望んだような死、高貴な目的を熱心に追求している最中に得た死であった（『ベーコン』、四七三頁以下）。

このような冷凍実験のベーコンが三〇〇年もの深い隔りを飛び越えて、文学者ホーフマンスタールの精神の師として、しばしば彼の心に浮かんだにちがいない。だがそれは、彼が死の床から人生の高邁な目的について美しい手紙を書いたためではない。こうした美しい手紙は、ベーコンに敵対的な人々の嘲笑をかうだけだったろう。しかし、思わず馬車から飛び降り貧しい百姓女から鶏を買いとめ悪寒におそわれながらも鶏の腹に雪をつめるベーコンのこうした果敢な実行力、人生の危機に幾度も見舞われながらけつて失うことのなかった執拗な探究

心に、ホーフマンスタールは心を惹かれたにちがいない。世紀の、と同時に人生の転換点に立つて、二八歳のホーフマンスタールは言葉の魔術に酔いしれる抒情詩人としての閉塞状態からぬけ出すために、こうしたベーコンをこそ必要としたのである。

であれば、「新しい革命に対する分析はすべて、ホーフマンスタールの『シャンドス卿の手紙』を出発点にしなくてはならぬ。……ここにおいてはじめて、十九世紀の伝統がたち切られたのだ」というワルター・イェンスの衝撃的な文学情勢論（『現代文学』八高本研一他訳、紀伊國屋書店V所収「人間と物」川村二郎訳、八〇頁）は、ここでは取り上げないことにしたい。あくまでもこの『シャンドス卿の手紙』をホーフマンスタール自身の個人的な内的体験の表現と見ることが重要だと思われるからである。その際忘れてならないのは、ホーフマンスタールがシャンドス卿という歴史的な仮面をつけて、その生き方と思想のうちに大きな共感を見出したフランシス・ベーコンに宛てて文学者としての危機意識を訴えている点である。しかし、『シャンドス卿の手紙』の実際の受け取り人はゲオルゲと考えられていたというのが、つぎのパウル・レクヴァットに代表される一般の見解である。

「この手紙の実際の受取人と考えられるのはゲオルゲであった。ゲオルゲはこの手紙の写しを受け取っている。ホーフマンスタールはついでのようにみせて、ある追書の中で彼にその写しのことを告げている。この間接的な言葉を理解できない人でも、チャンドスが友人に呼び戻した『共に過したあの美しき感激の日々の想い出』は『巡礼』をホーフマンスタールに献呈する時のゲオルゲの言葉を繰り返すに過ぎないのに気付くことである。ゲオルゲはベーコンとなって、即ち美しき言葉の熟達者ゲオルゲとして現われ、ホーフマンスタールは以前の如く鈍感な口ごもっている者として出てくる」(『二十世紀のドイツ文学』慶応義塾ドイツ文学会訳、二九五頁)

だが、二八歳のホーフマンスタールは、ゲオルゲと「共に過ごしたあの美しき感激の日々」をいまや過去に廃棄して新たな未来を要求するために、言葉の魔術的な支配の能力を断念すべき必要をはっきり自覚していた。彼はシュレーダー宛の手紙でも述べているように、『手紙』執筆の時、すでにその二年ほど前からずっと不安のうちが続いていた創造力の硬直状態を、青年期の創作から中年期の創作への苦渋に満ちた移行過程としてとらえようとしていたのである（一九〇二年二月一四日付け）。ホーフマンスタールにとって、「美しき言葉の熟達者」ゲオルゲは、「人生の危機に浸透されながらもけっして勇気を失わない偉大な人間」ではなかった。文字どおり、フランシス・ベーコンこそ彼にとってそのような「偉大な人間」にならなければならなかったのである。

二、劇場のイドラ・市場のイドラ

詩人の言語危機・意識危機という二〇世紀の文学的・実存的な問題に直進するのではなく、『手紙』の差し出し人と名宛人の関係がまず問われなくてはならない。もっとよく言えば、哲学者としてのベーコンが『シャンドス卿の手紙』とどのように内的に繋がっているかが、ここで問題にされなくてはならない。これまで、数こそ少ないが、この関連から『シャンドス卿の手紙』を説明しようとした試みがいくつもある。たとえば、H・S・シュルツは彼の論文「ホーフマンスタールとベーコン」⁽⁴⁾（一九六一年）のなかでこの手紙の源泉を明らかにしようとした。つまり、ホーフスマンスタールのシャンドス像は個々の主題や概念の用い方ばかりではなく、用語にいたるまでベーコンに依存しているというのである。これを受けて、ゴットハルト・ウンベンクが『初期ホーフマンスタール—詩的構造としての精神分裂病』⁽⁵⁾（一九六五年）という著書のなかで、この『手紙』におけるベーコンの主題

を發展させた。そこで彼は、「何らかの判断を表明するためにどうしても口にしなければならぬ抽象的な言葉が……口のなかでまるで腐った茸のように碎けてちりぢりになる」(P.H. S. 12)という誰もが引用する有名なシャンドスの言葉は、意識的にフランシス・ベーコンという経験主義者にして懷疑家に向けられている、と指摘している。P・ゴールセンは「現代における美術・文学と精神病理学」という一九七二年の論文で、右のような捉え方によって『シャンドス卿の手紙』のテクストに新たな解釈がほどこされた、とヴェンベルクの著書が高く評価している。

ところで、これらの論文がとりわけベーコンとの関連で取り上げているのは、『新オルガヌム』(一六二〇年)第一巻に列挙されている先入観、いわゆる「イドラ」にかんするあの有名な見解である。ベーコンによれば「イドラ」とは、真の認識を妨げる先入観、偶像あるいは幻影のことであるが、彼は人間の知性を取り囲んでいるこうした「イドラ」をつぎの四種類に分類している。すなわち、人間の本性に基づく「種族のイドラ」、個人に特有な誤謬としての「洞窟のイドラ」、言葉の横暴、言語の混乱に起因する「市場のイドラ」、哲学の伝統的な独断や虚構から招来される「劇場のイドラ」である。ベーコンはとりわけ実験と観察による正しい経験を強調し、それを妨げる一切の「イドラ」を排除しようとする。『新オルガヌム』のなかで、彼はたとえばつぎのように述べている。

「哲学のさまざまな学説から、そしてまた証明のまちがった法則から人びとの心にはいつてきたイドラがあるのであって、わたくしはそれらのものを劇場のイドラとよぶ。というのは、これまでうけいれられ、あるいは考え出された哲学はいずれも、舞台上に上され演ぜられた脚本であって、それぞれ架空の芝居がかった世界をつくり

あげたものだ、わたくしは考えるからである。」(『ベーコン』二三八頁)

つまり、「劇場のイドラ」は人間に生来備わっているものではなく、また知性のうちにいつしか忍びこんできたものでもなく、思想や学説の間違った論証の法則によって人間の精神に公然とほうり込まれ受け入れられたものである。こうして、人間の知性は、哲学体系ばかりでなく、伝統と軽信と怠慢のために歪められた諸学の原理や命題の前に立たされている。ヴンベルクは、ここから『シャンドス』への繋がりについてつぎのように述べている。

「すなわち、このことはそのままシャンドスに適應することができるのだが、伝統的な世界は間違った観念から成り立っており、それが真の認識にいたるべき真の経験の邪魔になっているというのである。ベーコンの要請にしたがって『精神』にたいする『感覚』を鋭敏にしなくてはならないシャンドスは、もろもろの対象や観念も地上の諸観念や宗教的解釈も、ちりぢりに砕けてしまうというこの恐るべき経験の前に立っているのだ。こうしたシレンマに陥ってベーコンに向かい合う時、シャンドスはこの人なら自分を正しく理解してくれるという期待を抱くことができるのである。というのも、シャンドスにおいて『精神の鋭敏化』と呼ばれている純粋な認識に達するために、『イドラ』すなわち先入観とみとめられるこうした観念の排除を要求するものこそ、ベーコンにはかならないからである。」(Wunberg, S. 109.)

このように、間違った先入観とその排除を媒介にして、シャンドス卿はフランシス・ベーコンと向かい合い、彼に正しい理解をもとめるのである。それまでの華々しい文学的活動からは考えられないような彼の異様な「沈黙」は、ベーコンの「イドラ」すなわち偶像の排除をあらわしている。だが、人間は容易に「劇場」からぬけ出

せないように、シャンドスの知性もまた今だに「ちりちりに砕けた」はずの言葉や概念に取り囲まれているのである。彼にあつては、宗教的解釈や地上の諸觀念がただ「逃げて行って」、彼から失われてしまふというだけではない。それらを伝達すべき記号としての言葉が彼の眼前で変身をとげ、こちらを凝視する目となり、誘惑的な光芒を放つて彼に逆襲してきそうな氣配をさえただよわせるようになるのだ。

「言葉はばらばらになって私の周りに泳いでおりました。それらは凝結して、私を凝視する眼となり、私もまたじっと見入らずにはおられないのです。それらはまた見下ろすと絶えず回転し眩暈めまいを惹き起こすような渦と化し、しかもその向こうに空虚があるのです。」(Pl. S. 13.)

自分がふだん用いている言葉がもはや自分の思いどおりにはならないという事実、かつてはありうることとさえ思つてもみなかった現象の前に、シャンドスはとつぜん立たされるが、これと同じ事態についてベーコンは『新オルガヌム』のなかで書いている。

「人びとは自分の知性が言語を支配すると感じているが、しかし言語が知性に反作用して知性を動かすことも起こるのである。」(『ベーコン』二四三頁)

シャンドスはまさにこうした言葉の逆襲にあつて、嘘をついた四歳の娘カタリーナ・ポムピリアをいさめようとした時、急にしどろもどろになり、顔面蒼白にならざるをえなかった。当然口にしなければならぬ「抽象的な言葉」がとつぜん不確実な色合いをおび人を混乱におとし入れるというこうした経験は、「市場のイドラ」を言葉の混乱に起因するとしてベーコンの指摘に通じている。というのもベーコンはさまざまな概念や觀念、名辭や術語の使用を、市場すなわち世論の先入観とつねに見なしていたからである。

「すなわち、人びとは語ることによって互いに結ばれるが、しかしその語る言語は、一般人の理解力に応じてさだめられる。したがって、言語がまちがって不適當にさだめられると、知性はじつにおどろくほど妨害されるわけである。」(『ベーコン』二三八頁)

言葉と現実等はしくはない。言葉は現実をそのまま写すものではなく、恣意的につくり出された一符号にすぎない。したがって、事物の名称はしばしばたんにその外面的なレッテル、舌のもつれにすぎない。かくて、シャンドスにおいてこうした先入観の数々がとぜんぐらつきだすのである。彼は人間と人間の行動をものはや「習慣の単一化する目」では見ることができなくなってしまう。この目は、ベーコンのいわゆる「市場のイドラ」を含むものしか捉えることができない。それらは、「一般人の理解力に応じてさだめられた」言葉であり記号でしかない。しかし、こうした事物の名称にまつわる先入観あるいは偶像を拒否することによって、独自の新しい方向づけが可能になるのである。というのも、こうした伝統的な間違った先入観が排除されてはじめて、シャンドスの精神の鋭敏化がはじまるからである。このように、疑わしくなった言葉、すなわち既定の言語慣習が認識過程に背馳するか、あるいは真の認識と疎隔をきたしてしまつたという経験は、意識危機・言語危機の批判的・創造的な契機にされるのである。病的な創造の苦しみと病的な言語喪失は、一切を窒息させる言葉の屑にたいする抗議および抵抗の形式へと合理化される。いまや紋切型の言葉が消え、絶望的な状態が一転して、シャンドスは物が新鮮な未知の相を示す生活関係の新たな出発点に立つことができるのである。

すなわち、ホーフマンスタールのこうした方向は、人間精神の間違った幻像・偶像からの解放をもとめるフランシス・ベーコンのイドラ論にまっすぐ通じているのである。『シャンドス卿の手紙』のなかに深く根をおろし

ているエイドロンの概念は、一八九二年ウィーン大学に入学した一九歳の法学部学生ホーフマンスタールの日記（一八九三年）の記述にまで遡りうる事が、明らかにされている。

「言葉とは真理という神的精神ゴットガイストの入りぬ密閉した牢屋である。それは偶像崇拜、すなわち、かつては人間のために生命をそなえ、数々の奇跡を行ない、神々しい世界の秘密の赫赫かくかくたる啓示だったエイドロンつまり幻像の崇拜である。このようなエイドロンは言葉の諸概念を意味しているが、それらは通常偶像そのものよりも神聖なわけではけっしてない。」（A, S. 105.）

「密閉した牢屋」とはこの場合、正しい認識にたいする言葉の妨害をあらわしている。さらに、「このようなエイドロンは言葉の諸概念を意味している」という文章、そして「偶像」という概念の使用が、ベーコンのイデオロギイに由来しているのは疑いない。したがって、この日記の記述からすれば、ホーフマンスタールが大学時代にキルヒマンのドイツ語訳（一八七〇年）でベーコンを読んだこと、あるいはウィーン大学教授フランツ・プレントナーの講義「実践哲学」の聴講（一八九二年—一九三年の冬学期）をとおしてベーコンをより深く知ったことは、明らかかなようである。

さらにヴェンベルクによれば、ドイツ・オーストリア学派の祖と仰がれた哲学者プレントナーが一九〇三年に発表した論文には、「先入観打倒！ ベーコンとデカルトの精神によって一切の盲目的なア・プリオリから解放されるべき現代への警告」という興味深いタイトルがつけられているという。とすれば、一八九二年—一九三年の冬学期になされたプレントナーの講義「実践哲学」ですでに、こうした観点からベーコンが論じられていたということは、十分考えられるだろう。ホーフマンスタールが『シャンドス卿の手紙』の名宛人としてフランシス・

ベーコンを選んだ時、彼は明らかにこうした大学入学当時のいくつかのベーコン体験を彼の芸術論の基礎にしたのである。

ホーフマンスタールは大学時代におそらくブレンターノのこのようなベーコン観に触発されていたので、その十年後に既成のあらゆる先入観に煩わされることなく自分の内的体験にしたがって一篇の芸術論を書こうとした時、彼はベーコンとさしで向かい合うことができたのである。これについては直接的な証拠がある。ホーフマンスタールの生涯の友人であった作家のレーオポルト・フォン・アンドリアンが、なぜ一六世紀エリザベス朝の一青年貴族シャンドス卿という「歴史的な扮装」をしなくてはならなかったのかと問いただしたのにたいして、彼は一九〇三年一月一六日付けの手紙でつぎのように答えている。

「ぼくは八月に何度もベーコンの『随筆集』を読んで、この時代のもつ親密さに深い魅力を感じ、一六世紀のこのような人々の古代にたいする感じ方にいたく熱中し、自分もまたこのような語り口で何か書いてみたいと思つたのです。だから、作品の効果を冷ややかなものにしたくないために、ぼくは自分の内的体験、ひとつの生きた体験から借用してなくてはならなかったのです。……過ぎ去つた時代を死んだままにしておかないことが、あるいは馴染みのないものを近しく親しいものと感じさせることが、ぼくにとって強烈な刺激となつたのです。」⁽⁷⁾

まさしくここから、ベーコンの精神によって「一切の盲目的なア・プリオリから解放されるべき現代への警告」としての『シャンドス卿の手紙』が、生まれてきた。アンドリアンに非難された「歴史的な仮面」は、じつはホーフマンスタールの内的体験の真実に深くかかわっていたのである。

このように『シャンドス卿の手紙』をめぐるヴンベルクの解釈では、文学的制作の病的枯渇は否定的評価に墮

してしまふのではなく、質的に異なった、神秘的な自己認識の一形式と解釈される。したがって、シャンドス卿は標準的思考や大衆の言葉を「市場のイドラ」として拒絶するフランシス・ベーコンと向かい合い、この経験主義者にして懷疑家のうちに彼の硬直した精神状態の正しい理解者を見出すことができるのだとされる。たしかにそうであろう。ベーコンの使った概念あるいはその用語までも、『シャンドス卿の手紙』のなかでひびき合う所がたしかに少なくはない。しかし、一九〇〇年という世紀の転換点において、価値崩壊のすさまじい危機にさらされ、詩人としては今なおゲオルゲの呪縛圏を脱しきれないでいたホーフマンスタールにとって、一六〇〇年というルネサンスから近代への巨大な転換期の思想家フランシス・ベーコンの、屈折した生の歩みこそがひとつの理想と映っていたのではないだろうか。そうした転換点に立つフランシス・ベーコンとはそもそも何者だったのか。ここで、ベーコンの正体があらためて問われなければならない。

三、ヴェルラム男爵

『カバラと薔薇十字団』のなかで、マンリー・P・ホールはつぎのように書いている。「近代科学の父、近代法改正者、近代『聖書』の編者、近代民主主義の守護者、近代のフリーメーソン創立者のひとり、フランシス・ベーコン卿は多くの目的と意図を持った人だった。彼は薔薇十字団員であり、薔薇十字団の開祖だったと暗示した人もいる。」(マンリー・P・ホール上掲書、二一七頁以下)

このように言うマンリー・P・ホールによれば、歴史上「一六二六年死亡」と記録されているベーコンの葬式は偽葬であって、彼はその後イギリスを去って、ドイツで偽名を使って長年過ごし、同国にあって、一生を捧げた薔

薇十字の教義普及のため、秘密結社に忠実に奉仕したことがありそうだと暗示するような記録が現存するといふ。マンリー・P・ホールは、こうしたフランシス・ベーコンにまつわる多くの謎の解明に挑んで、ベーコン＝シェイクスピア＝薔薇十字団員かという途方もない論争について考察を進め、シェイクスピアの肖像画の上にベーコンの肖像を置いてみたり、複雑な暗号解読法を用いてシェイクスピアからベーコン像を浮かび上がらせてりしている。これは歴史家ならばけっして足を踏み入れることのないどこか胡散臭いと同時に興味つくせぬ仮説の世界だが、ベーコンの思想と行動のなかにじつは自らの正体をけっしてあらわにはしない強い傾向が存在していたのである。洗練された宮廷人にして有能な法廷弁護士としてのヴェルラム男爵とは、ベーコンの世を忍ぶ仮の姿だったのである。いづれにしても、このヴェルラム男爵を途方もなく複雑でかつ深い謎につつまれた人物としているのは、時代が一方で幽暗な中世がまだ生きており、他方ではしかし新しい衝動が幾世紀もの伝統を肩からずり落とそうとしていた政治的・文化的・宗教的な闘争の、まさに境界時代だったからである。つまり、われわれはベーコンという人物を考える場合、ルネサンスから近代への過渡期における、イギリスの知的背景の複雑さ、あるいは矛盾を十分に留意してかかる必要があるのである。

とかく奇怪な噂の多いこのフランシス・ベーコンを近代的合理思想家とさせたのは、エリザベス朝の実践的数学者兼カバラ主義者だった同国人のジョン・デューだったといわれる。ある日、デューは彼の蒐集になる科学的草稿のなから、奇しくもベーコンと同姓のロジャーク・ベーコンの著作を彼にしめした。その博識により「驚異博士」と称されるこのベーコンは、三世紀前すでに神学者の攻撃にたいし有益な魔術を擁護し、キリスト教的知識の領域における魔術マジックの市民権を要求した人物であった。この魔術師ベーコンの著作を一読するなり、ベーコン

は錬金術やオカルト哲学を含む科学的世界認識の方法に目を開かれたのだという。イタリアの科学思想史研究家パオロ・ロッシは、その著書『魔術から科学へ』（前田達郎訳、サイマル出版、序文）のなかで、フランシス・ベーコンがルネサンスの魔術的、錬金術的な源泉に繋がっていたという事実を、ベーコン哲学の基本理念を理解するうえで不可欠のことであると云っている。ロッシのこうしたベーコン理解にも触れながら、イギリスのルネサンス史研究家のフランセス・イエイツはその『薔薇十字の覚醒』（山下和夫訳、工作舎、一七四頁以下）のなかで、ベーコンとその科学がエリザベス朝に華やかなりしヘルメスの伝統から、すなわちルネサンスの魔術マジックとカバラから浮かび上がってきたという興味深い指摘をしているので、つぎにそこに描かれた今ひとつのベーコン像を要約してみよう。

学問の進歩にかんする宣言の書であり、かつ今の現状についての控え目な総括であるベーコンの『学問の進歩』は、一六〇五年に上梓された。そこに示されたアダムの無垢な状態への回帰をめざす独自の進歩観、ヘルメス・カバラの伝統の影響によって、イエイツはベーコンの哲学の形成とドイツ薔薇十字運動の間に疑問の余地ない関連を見ようとしているが、これについては今これ以上触れないでおこう。ただわれわれにとつてとくに興味深いのは、なぜベーコンはここで学問の進歩の計画中に何よりも重要であるべき数学的科学的十分力説していないか、コペルニクス説やウィリアム・ギルバードの磁石論をなぜ拒否しているかという点である。従来ここに多くの非難が集中するのが通例だが、ラッセルも御多分に漏れずベーコンのこうした拒否の態度をあたかも科学にたいする彼の怠慢であるかのように見なしながら、「疑いもなくベーコンは、世俗的な成功に対する関心がもう少しなかったならば、もっと優れたことがやれたであろう」と言っている。しかしイエイツはこれまで非難の鋒

先が向けられてきたまきにこの空白部分にベーコンの秘密の鍵を見出そうとしている。つまり、ベーコンのこうした主題にたいする拒否反応は、自分の計画が魔術とかかわることをできるだけ避けようとする欲求からきている可能性が強いのだという。ついにながら、mathematicus はラテン語で数学者と同時に星占い (Strendenter) のふたつの意味をあわせ持っているが、ルネサンス期においてこのふたつはまだ密接に結びついていたのである。こうした点を含め、数学やコペルニクス説にたいするベーコンの拒否反応の起因を、イエイツはつぎのように推論している。

「ベーコンは、数学をあまりにもディーや彼の（『魔術』および）『降霊術』と密接に結びついているものとみなし、またコペルニクスをブルーノやその極端なエジプト的、魔術的宗教と結びついているものとみなしたのではないか……。いずれの場合にも、ベーコンは自分の計画を魔女狩りや妖術の噂から護るために、危険と思われる主題を敬遠したのだと思われる。……一七世紀初めには、そのような噂が数学者につきまとうことがありえたのである。」（フランセス・イエイツ上掲書、一七九頁以下）

一七世紀初頭、新旧教諸国抗争するなかで、魔女狩り旋風がヨーロッパ全土で吹き荒れていた。この時代、知識人が魔術師という噂をたてられることは、まだひじょうに危険なことだった。悪魔と結んでいるという理由で火あぶりにされた知の前衛が少なくはなかったのである。アグリッパやパラケルススと同じ道を歩んだ錬金術師の生涯についてほとんど何も知られていないのは、これが原因だといわれている。ベーコンが仕えたジュームズ一世にしても、『悪魔論』（一五九七年）を著わし、ありとあらゆる魔女にたいする死刑賛成論を展開していた。エリザベス朝に魔術師として君臨していたジョン・ディーは魔術師・降霊術師の汚名をはらそうとジェーム

ズ一世に援助を申し入れたのも空しく、不遇をかこちながら一六〇八年世を去った。他方ジョルダン・ブルーノは宗教的争いを愛と魔術マジックによって乗り越える宗教を説いてヨーロッパ中をさまよい、一六〇〇年イタリアにもどったが、より大きな自由主義と寛容の時代が到来するものと期待していた矢先に、故国イタリアで火刑に処せられた。フランシス・ベーコンはこれらすべてのことをしっかり脳裏に刻んでいたにちがいない、とイエイツは言う。したがって人間に内在し、人間を襲う「市場のイドラ」や「劇場のイドラ」は、けっしてベーコンの観念上の産物ではなく、つねに彼の身の周りをさまよう現実の恐怖や不安そのものであった。イエイツによれば、「ベーコンは、魔女ヒステリーがヨーロッパ中に高まっていた一七世紀の初頭に、科学的学問の進歩を請願しながら、多くの困難や危険の間で慎重な進路をとらなければならなかった」人物であった。このことはすなわち、ベーコン自身がつねに魔術マジック師・降霊術師とされる危険に身をさらし、あるいはそれを意識せずにはいかなる言論活動もできなかつたことを意味していよう。とすれば、セント・オルバンズ子爵叙任の直後にヴェルラム男爵をおそった収賄そして公職追放のスキャンダルも、彼のそれまでの人生でいつその嫌疑をかけられてもおかしくなかつた「妖術」の噂にたいする暗愚な時代の処刑とも受け取れる。こうした追放の不運にもかかわらず、ヴェルラム男爵が重要な哲学的著述をつづけ、旺盛な「実験」の精神を持ちつづけていたことはつと知られている。そして、冷凍実験のあのヴェルラム男爵が死んだあと、一六二七年に草稿のなかから日付けない著作、彼のユートピア物語『ニュー・アトランティス』が上梓されるのである。

以上の概観から見えてくるベーコンは、一六〇〇年を境に魔術的中世から科学的近代に墜落した人物、そのなかでかつてない言語危機と意識危機にゆさぶられた人物、しかも失意と孤独に陥りながらも「知」を唯一の杖に

して近代科学達成のヴィジョンに向かおうと努めた人物、それゆえ矛盾した経験の騒然たる継起を情熱的に生きた人物である。こういう人物だからこそ、シャンドス卿は彼に向かって「尊敬する友よ」と呼びかけ、自らの人生の危機について直截に語りかけることができたのだろう。

エリザベス朝時代のこの青年貴族、当代の教養ある、オックスフォードの学位取得者で耽美主義者らしいこの紳士もまた、その「知」がイドラすなわち間違った先入観・偶像に取り囲まれ、それによって脅かされ、それによって「沈黙」を強いられた人物である。彼は、全存在をひとつの大きな統一体でとらえる魔術的な「一種の持続的な陶醉状態」からぬけ出しながら、力の不在と物や言葉にたいする嘔吐感のなかで今また未知の新たな靈感の訪れを予感する人間、したがって靈感という魔術的・神秘的な力につねに取りつかれた人間である。ホーフマンスタールは、こうしたシャンドスの危機に自らの危機を重ね合わせながら、その言葉と存在の危険地帯を乗り越えるために、「人生の危機に浸透されながらもけっして勇気を失うことのない偉大な人間」、かのヴェルラムのベーコンを呼び出す必要があったのである。

四、カタリーナ・ポムピリア

シャンドス卿はその文学的活動が華やかだった過去について言う。「私たちがともに過ごした美しい感激の日々 (P II, S. 8)」、「要するにあの当時は、一種の持続的な陶醉状態のなかで、全存在がひとつの大きな統一体をなしているように見えたのでした。」 (P II, S. 10.)

シャンドス卿はまた「沈黙」に陥った現在について言う。「現在二六歳の私は、一九歳であの『新パリス』を、

あの『ダフネの夢』を、あの『祝婚歌』を一息に書きあげた人間なのでしょいか。」(PII, S. 7.)「私の場合は要するにこうです。すなわち、私は何かある主題を思考や言葉によって展開する能力を完全に失ってしまったのです。」(PII, S. 11.)

シャンドス卿はさらに新しい言葉を予感する未来について言う。「来年もさ来年も、いや生涯のいかなる年にも、私はもう、英語の本もラテン語の本も書かないでしょう。その理由は私にとっても苦痛なある特殊性からきているものです。……それはすなわち、私がものを書くだけでなく、それによつてものを考えることも許されているような言葉は、ラテン語でも英語でもイタリア語でもスペイン語でもなくて、その単語のひとつでさえ私には未知の言葉、物言わぬ事物が私に語りかける言葉、私がいつかおそらく墓のなかではじめて会う裁き人の前での証しをする時に使うであろうような言葉です。」(PII, S. 19f.)

このように、二六歳のシャンドス卿の精神は、三つの時間のあいだを、つまりわれわれの表象行為の三つの時間契機のあいだを、ゆらめき漂っている。彼の心の動きは、精神の悩みなど微塵もない神秘的・魔術的な「美しい感激の日々」を体験した過去から、言葉や物にたいする啞吐感に悩み精神の無力状態に陥っている現在へと移動し、ついには「未知の言葉」が甦ってくるかもしれない未来へとつき進んでいる。こうした状況の全体は、おそらく遠い幼年時代の思い出に遡ることができるのだ。

『シャンドス卿の手紙』に、つぎのような挿話が語られている。

「こんな出来事がありました。私が四歳になる娘のカタリーナ・ポムピリアに、彼女がついた子供っぽい嘘をいさめて、いつも本当のことを言わなければならないとさとしていた時、私の口の中にあふれたいくつもの概念

がとつぜん曖昧な色合いをおび、互いに混じり合つて、その小言をできるだけ早口にしゃべり終えて、まるで自分でも悪くなつたように、いや事実顔も青ざめ、額に強い重苦しさを感じて、子供をひとり残したまま、ドアをばたんと閉め、馬に乗つて人気のない牧場を駆け回つて、それでようやくいくらか気分がよくなつたのでした。」
(P II, S. 12.)

四歳の娘カタリーナ・ポムピリアとは誰か。もちろん、これは架空の女の子であり、『シャンドス卿の手紙』が完成する三か月前に誕生したホーフマンスタールの長女クリスティアーネとは直接関係がないだろう。いずれにせよ、自我はここではおそらく二重になつて現われるのだ。すなわち、「口のなかにあふれてきたいくつもの概念」がとつぜん曖昧になつて、あわてて部屋を出てゆく父親の「私」は、同時に彼の狼狽ぶりをじつと見つめたまま、ひとり部屋に残される「子供」になる。それはホーフマンスタール文学のひとつの特徴であり、初期の詩『体験』でも、夕べに「黄色の帆」をあげて死へ進み、しかもそれを意識している「彼」は「子供」になつて、おびえて泣き出しそうな幼な児の目をして岸辺に佇んでいるのである。

ところで、このカタリーナ・ポムピリアの挿話における「父親」のイメージは、さまざまな連鎖を生み出してくる。現に表現の不能に悩んでいるところの、父親となつた詩人自身、幼少の頃から深い愛情で結ばれていたホーフマンスタール自身の父親、そして人生の危機に直面して詩人が内面の悩みを訴えかける精神の父親。つまり、ここにおいて詩人の自我が「子供」になつた時、彼は幼年時代に遡つて実際の父親と向かい合い、そこからふたたび現在から未来に向かう途上で精神の父親と相對するのである。

ホーフマンスタールの、三歳の時の写真がある。幼児ホーフマンスタールは、独り子として病弱で神経質な母

親と教養のある堅実な父親から不安に近いほどの配慮で育てられた。そういう家庭の雰囲気の色濃くただよわせた三歳のホーフマンスタールは、そのおかつぱといい、ふっくらとしたペチコートの下から襟と袖口とすそに白いレースをのぞかせた衣裳といい、あるいはまた本の上に組んだ可愛らしい小さな手といい、その全体的印象は女の子である。ところで、ヘルマン・プロッホの『ホーフマンスタールとその時代』（菊盛英夫訳、筑摩書房）第二章「同化の歴史」および「神童」の項を要約すれば、⁽⁸⁾その父親は祖父と同じように非ユダヤ系の女性と結婚し、弁護士を開業した後キリスト教的市民社会の陣営に完全同化していた。感受性の強い子供ホーフマンスタールは「ほんの時たま夢の世界へ、文学や芸術の夢幻界へ引きこもったにすぎぬ人間の実例を父親に見た。」（同書、一二六頁）彼はこの父親から愛情に満ちた指導を受け、一緒にブルク劇場に通い、そこで彼が生まれてはじめて見た芝居はライムントの妖精劇やゲリルパルツァーの『人生は夢』だったらしい。こうして彼は異国の王子さながらに夢が生と化す「美しき日々」の原初的な経験を記憶にきざみつけたのだろう。しかしそれと同時に、あの写真の子は、父親の狼狽を見つめるカタリーナ・ポムピリアの眼をも持っていそうである。どうやらこの子は、夢と生が融け合う誘惑的な世界に住んでいたのだ。幼にしてすでに父親のような市民的人間に羞恥と罪意識を感じていたようだ。生涯を通じて、息子ホーフマンスタールはたしかに表面的には父親と親密な関係で結ばれていた。しかし、円熟期の作品『塔』のなかでとつぜん恐るべき形で開示される父親・息子の関係は、自ら外にさまよい出た息子の、市民性にたいする癒し難い罪責感のとつぜんの爆発だったのだろうか。息子ホーフマンスタールは詩人の道を選ぶことによって父親の市民社会から離反し、また『シャンドス卿の手紙』の前年にはユダヤ系の女性と結婚して二代にわたる同化過程からもぬけ出していた。娘カタリーナ・ポムピリアの前で急にしどろもどろ

になり、蒼白になって部屋を出てゆく父親フィリップ・シャンドスの狼狽には、おそらく息子ホーフマンスタールの市民的なものにたいする罪意識が遠くからひびいてきているのかもしれない。

しかしそれと同時に、カタリーナ・ポムピリアの挿話は、ホーフマンスタールの現下のある強烈な体験から生まれてきたものにちがいない。それはすなわち、あやうく決闘沙汰になることもあったらしいシューテファン・ゲオルゲとの長い確執に関連している。一八九一年二月のある日、あの有名なグリーンシュタイドルで、すでにロリス・メリコフのペンネームで詩をいくつか発表していた一七歳のホーフマンスタールは、『巡礼の旅』を書き終えたばかりの二三歳の詩人ゲオルゲに出会った。その時から一九〇六年まで一五年間も二人の交渉はつづくが、それは相互的な引力と反発の歴史であった。ゲオルゲは彼の影響下にある青年たちに取り囲まれ、一族を形成し世俗を軽蔑して厳格な生き方をする超繊細な唯美主義者・芸術至上主義者である。他方ホーフマンスタールは優雅な社交術を身につけた生粋の都会っ子、新聞寄稿の魅力にもとりつかれた解放的な詩人である。ゲオルゲの嵐のような勧誘、二人のあいだに呼び起こされたはげしい意気投合の感情の後にすぐ距離ができ、いく度かの不和が生じたのは、両詩人のそうした深い本質的な相違、とうてい橋渡しできない人間的齟齬に起因していた。ゲオルゲは「ひじょうに美貌の少年」であったホーフマンスタールを、俗界から遠く離れた純粹抒情詩の牙域に引きとめておこうとした。しかし、ホーフマンスタールはしだいに不安と焦燥にあおられ、美的孤立あるいは牢固たる芸術至上主義にたてこもるゲオルゲから離反してゆくのである。ホーフマンスタールはこの時、計画のままに終わった戯曲『僧侶の弟子』のノートに記した定式「最後のイニシエーション、そこで弟子は寺院から追い出される。雑踏する街頭へ」(DIII, s. 493.)を文字どおり志向していたのだった。この文脈からいえば、

「口のなかにあふれたいくつもの概念」がとつぜん曖昧になり、顔色を変えて部屋を出てゆくあのフィリップ・シャンドスは、転機に立って苦しむ抒情詩人ホーフマンスタールにほかならない。ゲオルゲ派からぬけ、自身のあの魔術的・夢幻的世界からついに飛び出して、シャンドス卿Ⅱホーフマンスタールは、物や言葉が未知の相を示す未来と向かい合うために、導師^{マヤス}フランシス・ベーコンをこそ精神の父として必要としたのである。

五、とら鱈^{うっぱ}のクラッスス

シャンドス卿はよく馬に乗って出かける。そんな折り彼の硬直した心のなかに、毒葉を飲んで断末魔の叫びを発する地下室の鼠たち、虚空にひたと見入る母親をかこみ死の痙攣^{けいれん}で苦しみます男の子たち、あるいは小作人がその下で釣り用のミミズを探す家の壁の格子窓をつきぬけて見える、湿っぽい部屋の片隅のベッドで死を迎えようとしている人たちといった、異様な形象が次々に浮かび上がってくる。『手紙』の全篇は、このように既成の言葉の秩序がとつぜん失われると同時に物の野放図な無秩序がはじまるという意識の解体過程を、言葉の燦爛^{さんらん}たる輝きのもとに描いているのだが、そのなかでもっとも深い印象を読者に残さずにはおかない挿話が『手紙』の最後になってからようやく物語られる。死を前にして苦闘するあのいくつもの形象と一体となって、主人公をおそう恍惚感が荒涼とした荒野の片隅に棲む「死の迫った最後のコオロギの音」にあらわれるだろうという件^{くだり}ではとんと唐突に物語られるが、それは紀元前六〇年にシーザー、ポンペイウスといわゆる三頭政治を行なったローマの執政官クラッススについての、つぎのようなスキヤンダルめいた出来事である。

クラッススは庭の池に一匹のよく馴れたとら鱈^{うっぱ}を飼い、このまったく見映えのしない、赤い目の魚を度外れに

可愛がっていた。これが町の評判になつていたが、ある時執政官のドミティウスが元老院で、この魚が死んだので彼が涙を流したといつて非難し、だから薄馬鹿だときめつけようとした時、クラッススはそれに答えて言った。「貴方の最初の夫人が亡くなられた時にも、二度目の夫人が亡くなられた時にも貴方がなさらなかったことを、私は私の魚が死んだ時にしたまです。」(P. II, s. 18.)

皮膚は黒く縁取られた白い斑紋を散らして美しいが、貪食で鬪争心の強い赤い目のとら鱈うらほと、財力をもつて政界での発言権を増していったといわれるクラッススとの組み合わせがすでに「耳目をそばだたせる事件」スキャンダルの性格をおびている。あの剛の者がたかが一匹の魚のために涙を流した！ それだけで、元老院全体ばかりか、町じゅうがクラッススを「嘲笑と輕蔑」の対象にしたであらうことは想像に難くないが、こうした一般の思考にあえて抵抗するかのように、「私はこの事件に感動をおぼえる」とシャンドス卿は言う。彼のこうした感動の仕方には、冷凍実験のヴェルラム男爵の挿話にわれわれがおぼえる感動と通じるものがある。『手紙』の筆者は、シーザー、ポンペイウスと対立・連係を繰り返した実力者という今日のクラッスス評価とはかかわりなく、ただ彼の人間の真実だけを見ようとしている。そのような真実はしかし、社会の表面を足早に走るスキャンダルと繋がっているが、大衆の目がまったく届かない深い所にひそんでいるものなのだ。そういうものに目を届かせることによって、『手紙』の筆者は、さまざまなイドラにおおわれた日常生活的現実に仮死の状態をあたえつつ、シャンドス卿に「名づけ難い何ものか」をとらえさせようとする。それはいかにして可能なのか。その「名づけ難い何ものか」を予感する所まで進もうとするシャンドス卿の思考は、ひとつの境界儀礼的構造を含み持っている。というのも、シャンドスに感動をあたえる事件そのものが、「もっとも高貴な事柄を協議し、世界を支

配する」元老院のただなから、秘匿の厚い壁をつき破って流出してきたものだけに、こうした特権的な事件にはつねに聖性顕現の可能性が孕まれているからである。

イギリスの神学者ロジャー・グレンジャーがその著書『言語としての儀礼』（柳川啓一他訳、紀伊國屋書店）のなかで言うように、「儀礼の主要な関心が、事態の変化とそれに伴う恐怖と不安にたいして注がれている」とすればシャンドス卿もまた儀礼が関与するこうした人間の不安と直面している。それはすなわち、古い様式が廃止されながらも新しい様式がいまだ到来していないというまさに「深淵」をのぞきこむような事態にたいする人間の不安である。シャンドス卿が置かれた人間的な危機状況が嘘いつわりのない真実の瞬間であれば、その状況はつねに、不安に対処するための「装置」として儀礼を要求する思考に貫かれているはずである。社会や生を厚く保護する日常的価値体系から「軽蔑と滑稽」のなかに追放された時のクラススが陥った意識の空白は、シャンドス卿が「深淵」と呼んだものであった。それは、自我と言葉と事物の神秘的な統一性がとつじょとして無化された瞬間に生ずる意識の空白としての「深淵」である。シャンドス卿が陥ったそのような「深淵」は、過去からも隔てられ、未来からも隔てられ、それゆえ混沌として曖昧な境界性である。ウンベルクおよびゴールセンは、ホーフマンスタールについて、境界性を前にして不可避的に生ずる精神分裂病的不安を指摘するが、それはしかし日常的な意味での力の不在がとつぜん靈感の湧出に転ずるといった逆説的な状況に生きる者に宿命的に起こることなのである。

日常的な言葉においてではなく、本源的な言葉においてすべてを言い、すべてに声と言葉をあたえることができるという幻想にみちびかれて、詩人はそうした絶望的な境界空間に誘いこまれてゆくのだろうか。そうした空

間のなかにあって、彼は既得の言葉に保護された安全な道から離脱し、生産者としては弱者あるいは無力者とならざるをえない。しかし、力の、靈感の極端な不毛状態から当の詩人がとつじよとして新たな靈感あるいは未知の言葉の予感におそわれたように、「名づけ難い何ものか」に接触しうる者へと変化する瞬間を、ホーフマンスタールはつぎのように感動的に描いている。

「このクラッススの像すがたが、時折り夜私の頭脳に浮かんでいきます。それは私の頭脳に突き刺さり、その周りが全部腫んで、ずきずき脈打ち、煮えくりかえる刺片のようです。その時私自身も湧きかえり、泡立ち、ふつとうし火花を散らすように思われます。そしてその全体が一種の熱に冒された思考ですが、しかしそれは言葉よりももっと直接的な、もっと液体のような、もっと赤熱した素材によって行なわれる思考です。これもまた同様に渦巻きですが、どうやら言葉の渦のように底なしの深淵へみちびくのではなく、なにか私自身のなかへ、やすらぎのもっとも深い懐のなかへみちびいてゆくように思われる渦巻きなのです。」(P. II, S. 19.)

してみれば、シャンドス卿にとって、とら鱈うなぎのクラッスス像は、彼の破局を決定づけるひとつの「刺片」であると同時に靈感の顕現を可能にする「刺片」、あるいは、言葉が失われ、事物が日常の価値を剝奪されたシャンドス卿の「深淵」に打ち込まれた楔となる。こうして楔が打ち込まれた時、シャンドス卿の思考はそれまでの硬直した不毛状態から脱して赤熱化し流動化して「渦巻き」を描きだす。

ある種のイニシエーション儀礼においては、加入者が一定の母音を朗唱しながら輪の周りをぐるぐる回り、ついに意識状態の変化を伴いつつ恍惚状態にいたるというものがある。ホーフマンスタールは「人生の危機に浸透されながらもけっして勇気を失わなかった偉大な人間」フランシス・ベーコンを導き手として、言葉と思考の

不毛に悩んでいたシャンドスにこのような一種のイニシエーション儀礼の過程をたどらせようとしたのである。『手紙』の筆者は、これまでの言葉の不毛・欠如をくぐりぬけて、未知の言葉の可能性を再び見出し事物の底に存在する沈黙をも包みこむ能力をもった赤熱する思考を提示し、自分自身の内部にある「渦巻き」の弁証法的なイメージによって、新たな自我誕生の予感を、ここに物語っているのである。

六、神聖顯現^{エシラフアニー}

「われわれは一年分の食糧をつみこんでペルーから南海を経て支那、日本へ向かった。」（『ベーコン』四一五頁）

これは、フランシス・ベーコンが世を去って一年後の一六二七年に上梓された彼の遺稿『ニュー・アトランティス』の冒頭である。この書物のなかでベーコンは、彼の理想とする科学的・宗教的な社会の夢をユートピアの実験室さながらに描いている。それは、嵐で難破した船員たちがニュー・アトランティスという新しい孤島を発見し、そこで完全な社会を打ち立てている住民たちの、すぐれて科学的な世界に案内される話である。この書のなかには、科学技術についての比類ない洞察力をもって、飛行機や潜水艦が、そればかりかマイクロフォンや電話までも、すべて「自然の偉業」の枠内で構想され暗示されている。

「われわれはまた鳥の飛翔をまね、ある程度空中を飛ぶことに成功した。われわれはまた海底にくぐり、大洋に抗して進む船やボートをもつ……われわれはまた種々な珍しい時計やその他同じような回帰運動をするもの、あるいは永久運動をするものをもつ。われわれはまた人間、獣、鳥、魚、蛇などの生物をつくって、その運動を

模倣する。」(『ベーコン』四四〇頁)

ベーコンの理想都市ベンサレムの国王サローモナの創設になる「ソロモンの館」の研究を支えている実験科学の進歩は、知のための知ではけつしてなく、知の力をすべて人類の利益と幸福にあてようとする学問の進歩であった。

こうした学問の進歩を説くベーコンには、一六〇〇年前後にイギリスでなされたものだけに限っても、ハーヴェイの血液循環説や、ギルバードの万有磁気説、ネイピアの対数、あるいはニュートンの望遠鏡による観測といった重要な科学的発見は何ひとつない(ロッシ上掲書、一九頁)。だがしかし彼は、科学的な知の社会的重要性を自覚し、偏見にとらわれない人間生活の確立を目指した最初の哲学者のひとりなのである。それゆえベーコンにおいて問題なのは、過去に遡るにしてもつねに、人間のよりよい未来の生活に向けられた合理的・理性的な思考なのである。そうした思考が、シャイロック的状况を超えてキリスト教徒とユダヤ教徒との間に新しい、そしてよりよい関係を樹立していこうとするヴィジョンともつながっていくことは、言うまでもない。じっさい、この書物には、割礼を受けたユダヤ教徒の商人が改宗しないでなぜこの国に完全同化しえたかについての長い記述さえ見出されるのである。

フランシス・ベーコンにどうしてこのような科学的・宗教的な「神聖顕現」が可能だったのだろうか。それは転換期の人々や社会をおそうあの得体の知れない不安一般と関連しているのだろうか。ヘルマン・ブロッホは『群衆心理学』の「歴史法則と自由意志」の章において、ヨーロッパの歴史のなかで人間に途方もない破局と感じられた二つの転換期について次のように書いている。

「一つの文化時代それ自体のみならず、さらに自由農民の超文化的な生活形式が終末に向かうあの歴史的瞬間ほど、恐ろしく直接的に、覆いようもなくあらわに、人間と人間的なものが脅威にさらされる時はない。ヨーロッパの歴史はそうした切れ目を二度経験した。一度は紀元前一世紀であり、今一度はそれよりほぼ二千年後の一八世紀啓蒙主義の初めである。⁽⁹⁾」

ローマの新しい群衆を前にしてウールギリウスをおそった恐怖、そして一八世紀・一九世紀という変転の時代に、ルソーやトルストイをおそった恐怖は、ともに彼らに自然に目を向けさせ、数々の遡行のイメージを生じさせ、往時を黄金時代の夢へと変容醇化させた。しかし、未来の可能性に開かれた『ニュー・アトランティス』を読む限りでは、どうやらベーコンは目を後方に向けたウールギリウスやルソー、トルストイの、遡行のイメージに横たわる深いペシミズムとはまったく関係がなさそうである。だからエルンスト・ブロッホが『希望の原理』のなかで「ベーコンの未完の作は技術にたいするオプティミズムのゆえに、もはや破局すら知らない」と言っているのは、ある意味で正しい。しかし、この書の「オプティミズム」は、ベーコン自身のたんなるオプティミズムから生まれてきたものではないだろう。「技術にたいするオプティミズム」として顕現してくるベーコンの透明で精緻な科学的・社会的ヴィジョンがじつはまさに破局の体験から生まれてきたものであるということが、ホーマンスタールとの関連においては重要なのである。

コロンブスの新大陸発見、コペルニクスの地動説、そしてかずかずの新星の発見は、それ以前の二千年にもわたるアリストテレス的な地球中心の宇宙像を根本的に打ちくだき、またその上に立脚していたキリスト教的な世界観を根底からゆさぶるのに十分であった。あまつさえ、度重なる不吉な日蝕や、一五九八年には二度もあった

皆既月蝕は、迫りくる世界の終末の恐ろしい影を人々の心のうちに深く投げかけずにはおかなかった。占星術師たちは、一六〇〇年七月に観測された太陽異変によって地球への不吉な影響が一六〇一年一月二〇日から二年半までの間に起こるであろうと予言していた。その予言が的中したかのようになり一六〇一年二月に起こったエセックス伯の謀叛とその斬首の刑という衝撃的な事件によって、当時政治不安と経済不況のただなかにあったエリザベス朝末期のイギリスは根底からゆさぶられ、終末感が人々のなかに広く深く浸みわたっていった。

ベーコンはエリザベス朝の絢爛たる魔術的ルネサンスから、ジョルダノー・ブルーノやエセックス伯、そしてジョン・デューと同様に近世へと墜落したのである。ジェームズ一世治下で科学的学問の進歩を説きながら、ベーコンは大法官になり、ヴェルラム男爵に叙せられ、そしてついにセント・オルバンズ子爵に叙されたにしても、彼の深層ではあの墜落がつづいていたのである。収賄汚職の罪に問われ、公職追放になったのは、その社会的・政治的なあらわれのひとつにすぎなかった。あの一六〇〇年の墜落からフランス・ベーコンはヘルマン・ブロッホのいう「一つの深甚な不安」、「重苦しい形而上的な恐怖」にさらされて生きたのだ。だが、時代と生をおそった破局が不安として感じられるからこそ、その不安はシャンドスのあの限らない謎めいた恍惚の瞬間にも転じうるのだ。その赤熱し流動化する恍惚の渦巻きのなから、ベーコンのうちに『ニュー・アトランティス』というユートピアの、あの「聖性顕現」のヴィジョンが生まれてきたのではなかったろうか。

ホーマンスタールもベーコンから三〇〇年後の一六〇〇年という世紀の転換点で、魔術的・神秘的な一九世紀の伝統から散文の時代に墜落したのである。その時から彼は驚異的であると同時に絶望的な瞬間の不安にさらされるにいたった。それは一瞬のうちに夢幻をつき破る不安であるために恍惚の瞬間にもなる。過去はいまだ痕

跡をとどめてくすぶりながら、未来がまだその完全な姿を現わしていない真底不安な夢見る時であるだけに、不安はそれだけ赤熱し一種熱にとりつかれたような思考の渦巻きになるのである。とすれば、ベーコンに『ニュー・アトランティス』を書かせるにいたった動機は、ホーフマンスタールに『シャンドス卿の手紙』を書かせた動機に深く通じるものがあるのだ。つまり、ベーコンが基本原理として提起しているユートピア的な夢の数々は、それがどれほど合理的・科学的な装いをこらしているにせよ、フィリップ・シャンドスに破局からこつぜんとして現前してくる聖性顕現の世界と軌を一にしているのである。たしかに、この瞬間において、『ニュー・アトランティス』の世界同様、世界はシャンドスの目にもはや神秘的にも魔術的にも映らなくなり、すべての存在が「持続的な陶醉状態」のなかでひとつの大きな統一体として現出してくるのでもなく、ますます合理化と理想化の度合いを深めて、「部分がさらに部分に分かれる」ような具合に赤熱し輝いて見えてくる。つまり、シャンドスもまたいわば破局に守られるようにして、事物の内奥との新しい接触の瞬間が、未知の言葉との戦慄的な予感のうちに湧き上がってくるのである。

しかし、『シャンドス卿の手紙』最後のこのような「聖性顕現」を強調することは、危険である。というのもこうした「聖性顕現」の体験から、ただちに新たな存在様式が、未知なる言葉との統合状態が、全的に出現してくるわけではないからである。したがって、シャンドスもホーフマンスタールが陥った「神秘を失った神秘家」の境界状態から、世界全体と自我との神秘的な同化という魔術的なものが跡形もなく消え去ってしまったわけではない。というのは、一九〇四年の『詩についての対話』のなかで、詩人自身が美の秘義を追い求めていた『手紙』以前の、神秘的・魔術的な世界に逆もどりしたかのように、象徴にまつわるあの血なまぐさいイメージが再

燃するからである。

「ぼくは犠牲を真先にささげた男が目に見えるような気がする。彼は神々が自分を憎んでいると感じた。……その時彼は天井の低い小屋と彼の心の不安との二重の暗闇のなかで、鋭い曲がったナイフに手をのばし、この恐ろしい、目に見えぬものを有めるために、まさしく自分の喉から血を迸らせようと身を構えた。するとその時、不安と狂乱と身に迫った死に興奮して、彼の手は半ば無意識的に、もう一度、暖かく柔らかい牡羊の毛のなかに突っ込んだ。——この動物、この生命、闇のなかで息づいている生温かい血の、わが身にこれほど身近な、こんなに親しい存在——不意にナイフが獣の喉にひらめき、生温かい血がこの動物の毛皮に、人間の胸と腕に、同時にしたり落ちた。そして一瞬彼はそれが自分の血なのだと思つたに相違ない。彼の喉から迸りてた官能的な勝利の声と、動物の断末魔のうめき声とが、まじり合つたその一瞬、彼は高められた生の官能的な歓喜を死の痙攣だと思つたに相違ない。一瞬間、彼は動物のうちにおいて死んだに相違ない。ただそのようにしてこそ、動物は彼の身代わりに死ぬことができた。動物が彼の身代わりに死ぬことができたということが、ひとつの偉大な神秘、ひとつの偉大で不思議な神秘になつたのだ。これから以後、動物は象徴的な犠牲の死を死ぬことになつた。……これが詩の魔術なのだ。ぼくらの肉体に触れ、ぼくらを絶えず変化させる、言葉のもつ魔術的な力、この魔術的な力のために詩は言葉を語るのだ。」(P II, s. 88f.)

ここから、アドルノやベンヤミンを引き合いに出してきて、ホフマンスタールのこの文章がもつ政治的ないかがわしさと暗鬱さについて論ずることはここでは差し控えておきたい。ただ、ホフマンスタールは既成の解釈や観念を拒否して未知の言葉と新しい靈感をもとめながらも、『シャンドス卿の手紙』に開示されているよう

なあの極限的な境界状態から、ふたたび旧秩序の世界へ逆行してしまっている、ということだけは指摘しておく。『詩についての対話』のなかに展開されている象徴論は、まさにベーコンの意味での「イドラ」すなわち間違った先入観および偶像にはかならないからである。ホーフマンスタールは破局の後の安らぎにみちた赤熱的な思考を、既成の秩序の、または魔術的・神秘的な「象徴」の暗がりのなかへ回帰させてゆく危険性を持った詩人であった。「劇場のイドラ」や「市場のイドラ」を除去しようと努めながらも、彼は魔術的な「イドラ」に屈服することをつねに繰り返していた。その意味でホーフマンスタールは、「イドラ」から解放されるべき人間としては挫折したのである。しかし、その「挫折」というネガティヴを自らの文学のなかに切り開いてみせたことが、ホーフマンスタールに文学的成功をもたらしたのである。だからこそ、リルケやムージルが、ハイムやカフカが二〇世紀の詩人としての彼らの文学的出発点を、そこに見出せたのである。

マックス・ブロートは『道を示す者としてのカフカ』のなかで、大学生カフカが『シャンドス卿の手紙』に深い感銘を受けたと述べている。¹¹¹ここから、カフカの『ある戦いの記録』に描かれたシャンドスの状況、すなわち伝統的な主体と客体との関係の根本的な変化について、あるいは『シャンドス卿の手紙』から出発するとされる「ドイツ散文の革命」について、多くの興味深い事柄を語るができるだろう。しかしわれわれは、ホーフマンスタールがフィリップ・シャンドスという歴史的な仮面をつけて、彼の「最大の恩人であり、当代随一のイギリス人」であるフランシス・ベーコンに宛てて、何故内面の苦悩をつづるあのような手紙を書いたか、というもっとも基本的な問いから出発したのであった。過去の人物の生き方と思考によって今日の言語と意識の危機状況を逆照射しようとしたホーフマンスタールの方法に興味を持つ者は、文学史家がその文学情勢論を始めるま

にその地点で、議論を終えなければならぬ。

并

- (1) Hugo von Hofmannsthal, *Gesammelte Werke in Einzelausgaben*, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1959 (Prosa II), S. 7. 同書から引用は P II. Aufzeichnungen 14 A, Dramen 14 D の巻頭を記す。
- (2) Walter Jens, *Statt einer Literatur Geschichte*, Pfullingen 1957, S. 109.
- (3) Paul Requadt, *Hugo von Hofmannsthal*, in: *Deutsche Literatur im 20. Jahrhundert II*, hrsg. von H. Friedmann und O. Mann, Heidelberg 1957, S. 71f.
- (4) Stefan Schultz, *Hofmannsthal and Bacon: The Sources of The Chandos Letter*, in: *Comparative Literature*, Eugene, Oregon, USA, vol. XIII, Winter 1961, Nr. 1, S. 1-15.
- (5) Gothart Wunberg, *Der frühe Hofmannsthal*, Kohlhammer Verlag, 1965, S. 106ff.
- (6) R. コールマン「現代における美術・文学と精神病理解」(小岸昭訳、ハガーダマー／フォークラー編『講座 現代の人間学』文化理論と人間像)徳永恂他訳、白水社)所収、一七六頁以下)
- (7) Der Brief Hofmannsthals an Leopold Freiherrn von Andrian, vom 16.1.1903.
- (8) Hermann Broch, *Hofmannsthal und seine Zeit. Eine Studie*, in: *Dichten und Erkennen. Essays*, Bd. 1, Zürich 1955, S. 106ff.
- (9) コルマン・ブロッホ「歴史法則と自由意志」(小岸昭訳、△『群集の心理』入野田真右他訳、法政大学出版局)所収、二九一頁)
- (10) Ernst Bloch, *Das Prinzip Hoffnung*, Bd. 2, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1959, S. 765.
- (11) Max Brod, *Franz Kafka als wegwiesende Gestalt*, Tschudy-Verlag St. Gallen S. 14f.